

## 高校教師が知りたい！ 進路指導改革おさえておきたい7つのステップ

こんにちは！ 編集部です。

今回のテーマは、「高校生の進路指導」。文理選択や受験校のアドバイスなど、生徒が人生を真剣に考えるきっかけになる進路指導だけに、どのように進めていけばいいか迷ってしまいますよね。そこで今回は、進路指導部の中でも大学進学指導の経験が長く、多くの生徒と関わってきた岡本先生からお話をうかがってきました。先例のない画期的な進路施策を次々と実現されてきた岡本先生が考える、進路指導改革を実現するための鉄則などを、全3回にわたってお届けします！

多くの学校が抱える進路指導の問題点とは

ー 進路指導で悩む高校の先生は少なくないです。自校でこれまで行ってきた進路指導を続けていくべきなのか、それとも新たな指導をすべきなのか、迷う先生もいるのではないですか？

岡本 「生徒に理系を勧めるべきか」「どの大学を受験校とすべきか」……高校生の進路指導には頭を抱えてしまいますよね。子どもたちのためになることをやってあげたいと思いつつ、つい前年踏襲の進路指導を繰り返してしまうという先生もいるかもしれません。

ただ、生徒を取り巻く環境は年々変化しています。前年踏襲であったり、周りの意見に流される進路指導を続けていたりすると、かえって彼らのためにならない、ということもありません。

たとえば進路指導の大きなポイントである文理選択について。昨今は理系ブームで、将来のために専門的な知識や技術を身につけるために理系を志望する生徒が多くなっています。「就職をしやすから理系」と考えている傾向も強い。教師や保護者もそんな風潮に流されて、「迷ったら理系」という選択をしがちです。

しかし、私は「本当にそれでいいの？」とってしまうんです。もちろん、これからの世の中、理系人材が活躍する場は増えていくでしょう。しかし、本人の得意や興味を無視して理系の道を選ぶことは考えものです。

ー 教師や保護者は、子どもの将来が安泰になるよう願って進路を勧めているんですよね。それはそれで堅実な道にも見えますが…？

岡本 そうですね。しかし、その“安定志向”は必ずしも正しくないと私は思います。たとえば、私が関わった生徒の中に、「国語や英語ができないから、理系を選ぶ」という生徒がいましたが、いざ理系になってみると理系科目もできなかったんです。こうなると大変。

そもそも理系科目が苦手なので浪人しても、伸び悩んでいました。その上、理系の大学に入るとそのまま将来の仕事につながっていきますから、苦手な分野から生涯離れられないということになりかねません。

「理系は“つぶしがきく”」「資格を取れる道に進んだ方がいい」といった、一般的な情報だけで進路指導をしてしまうことには大きな問題があると考えています。その時々の社会状況や、生徒のレベル、ニーズをきちんと掴んで進路指導をしなければならないでしょう。そこで求められるのが、「状況に合わせた的確な進路指導」なんです。

ー これまでなされてきたような指導ではないものが求められるということでしょうか？しかし、学校では新しい取組みはなかなか始めにくいと聞きます…。

岡本 そうですね。状況に合わせた進路指導を実現するには、ときには、先例のない指導を行う必要も出てくるでしょう。とはいえ、新しい取組みを導入するのは簡単なことではありません。

そこで、私の実体験の中から生まれた、進路指導に新たな施策を入れるための7つのポイントをお伝えします。

#### 進路指導改革を進めるための7つのステップ

ー 前年踏襲の文化や多忙感があり腰が重い先生もいる中で、どのように新たな取組みをスタートさせたらいいのですか？

岡本 生徒のことを考えて思いついた新たな進路の取組み。成功の鍵を握るのは“手順”です。

以下、7つのステップに沿って導入を図ってみましょう。

##### (1) 生徒の声を定量で集める

独りよがりの取組みにならないように、必ず生徒のニーズとマッチしているかを検証する必要があります。私の場合、思いついたアイデアがあれば、何はともあれ生徒へのアンケートを集めていました。結果を踏まえて、施策の内容を再検討したり、校長などの管理職への説得材料としたりします。

##### (2) PTA や保護者を巻き込む

先例のない取組みを実行しようとする、反対意見は出てくるものです。過去に大学見学を企画した際、複数の教員からNGが出そうな雰囲気がありました。そこで、職員会議で投げかける前にPTAに相談することにしたのです。「進路指導部だけの企画ではなく、PTAとの共催です」と説明することで、教員たちが納得していったのです。

保護者の巻き込み方についてももう少し詳しくお話ししましょう。

保護者を味方にするために欠かせないのが、“情報をオープンにする”ことです。今の保護者は生徒と同じレベルの詳しい情報やネットにはない情報を求めています。大学受験が年々多様化しており、保護者と生徒は膨大な受験校や受験方式の選択肢の中から選ばなければならないため、ある種仕方ないことともいえます。

ー 近年では、どうしても保護者からの学校への批判の方が注目されますよね。しかし、実際は味方になって取組みも応援してくれる親御さんも少なくないのですね？

岡本 もちろんです。ほとんどの方が自分の子どもが通う学校をよくしたいと思っています。

だからこそ、積極的に教師から進路情報を提供し、漠然とした不安を解消していくことができれば、教師に味方する保護者は増えていくといえるのです。

##### (3) 仲間の先生を見つける

取組みの改善や学校改革は、ひとりだけでできるものではありません。実行するには他の先生からの協力を得る必要があります。私の場合、生徒に対する考え方が近く、自分に対してポジティブなイメージを持ってくれている、そんな先生を2人程度仲間にしていました。

##### (4) 管理職から話を通す

取組みの企画を教員間で通す際、校長や教頭など最終的な決定権者にまず意向の確認を取りましょう。トップの岡本Kが出ていれば、その他の職員からも反対意見が出にくくなりますし、せっかく企画が進んだのに管理職の意見で頓挫してしまうということもなくなります。このときには、さきほどお話した生徒のアンケートなども活用していくと納得感をもらいやすいでしょう。

##### (5) お金の問題をクリアする

新たな企画を実行するには、多かれ少なかれお金がかかるもの。ただ、毎年の予算は限られていますし、かといって生徒からお金を徴収するのは難しい…。

ー お金の問題でNGが出てしまうと、そこで諦めざるをえないと考える先生も多いと思います。しかも、学校の予算は何にどれくらい使うかカッチリ決まっていますよね？ そんな状況でも、やり方によっては捻出ができるのですか…？

岡本 はい、実際に私も過去にお金の問題にぶつかったことがありました。この時は、PTA や後援会の支援により解決することができました。工夫を凝らすことで、生徒からお金を取らずとも取り組みを実行することはできるんです。

(6) できるだけ多くの企画を出す

ここまでお話ししたポイントを実行しても、その取り組みが必ず実現できるとは限りません。そんなときも挫けないこと！ 私の場合、企画を10出したとすると、3つ通ればいいと思っていました。いわば「数撃ちゃあたる作戦」です。1回ダメだからといって諦めてはいけません。粘り強く、提案し続けるのです。

(7) 教師自身がやりたいことを全うする

最後になりますが、これが最も大切なポイントです。進路指導取り組みの成否を分けるのは、教師がどれくらい熱量を持ってできるかです。私は過去に、予備校の授業を補習で取り入れたり、著名な方を進路講演会に呼んだりしたこともありますが、自分がこの人の話を聞きたいと心から思える方を選んでいました。自分が「この人は！」と思う方でなければ、生徒に響かないと思ったからです。

ー しかし、「有名人だから」「この人ならば色々な学校で講演をしているのでオファーを受けてくれそう」などの観点で呼んでしまうことも多いと思いますが？

そうですね。実際に私が惚れ込んだ方を呼んだ方が生徒たちの反応がよいことは、確認しています。どんなに著名な方でも、高校生の心に伝わるものがなければ意味がありません。もちろん、生徒や保護者のニーズを把握することが前提ですが、「自分が良いと思うこと、生徒のためになると信じられること」を実行することが、何よりも大切なのです。今回は、私が実際にどのような進路指導の取り組みを行ってきたのかをお話します。

【今回お話を聞いた岡本眞一郎先生は、東京都と埼玉県の公立進学校5校での勤務経験のある50代のベテラン教諭。英語科。これまでに進路指導改革を、自身の工夫と努力により実現してきた。】